

登米市米山町桜岡の同市職員、菅原仁さん(29)は1月下旬の2日間、生まれて初めて役者になつた。登米市の登米祝祭劇場で開かれた第8回登米市民劇場「夢フェスタ水の里」のこと。

今回の出し物は同市米山町の伝承を基にしたが、割り当てられたのは「じろかき地蔵外伝」和尚になった相撲とり」。

れ、気軽に出ていた。だが、割り当てられたのは「じろかき地蔵外伝」和尚になった相撲とり」。

無駄こそ「ぜいたく」

真骨頂は「遠回り」夢フェスタ

登米市米山町桜岡の同市職員、菅原仁さん(29)は1月下旬の2日間、生

まれて初めて役者になつた。登米市の登米祝祭劇場で開かれた第8回登米市民劇場「夢フェスタ水の里」のこと。

先輩に「端役で舞台に立たないか」と声をかけられた



登米祝祭劇場館長

山田 悅且

を諭す重要な役回りだった。初日はガチガチ。千秋楽になって腹の底から声が出た。

「見えない所で多くの方が働いていた。それを本番で知ったのが一番の感激だった」。約15人の参加者や客どもに、心地よい余韻に浸つたのは言うまでもな

筆から道具の製作、衣装、方々が働いていた。それを容師、加藤和子さんは4回連続の常連。今回は演

出チームのリーダーを務めた。「素人の私の声が

かかり、人材の確保によつたのは言うまでもな

ほど困っていると思つた」

がかりの大事業だ。

筆から道具の製作、衣装、

いた。だが、カーテンコ

ールでは絶賛を浴びた。

やらなければ』と、全員

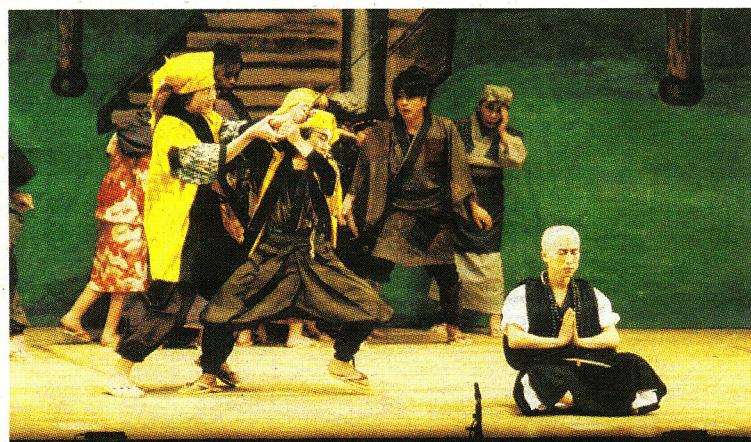
私を支えてくれた

世は二十時代。だが、

最後の最後に『私が

が一丸となつて頼りない

友垣



好評を博した、第8回夢フェスタのひとコマ=
1月28日、登米祝祭劇場大ホール

△ 頬染めし役者に拍手送りある客もまた夢紡ぐ
友垣

夢フェスタは平成10年劇場側の準備不足もあり、仕上がりが遅れに遅延に始まった。岩手県遠り、仕上がりが遅れに遅延へ1万2355人。この数字が、夢フェスタへの確かな支持を示してはいないだろうか。

△ どんちょうが下りた瞬間に、参加者たちは思ったに違いない。「無駄の積み重ねこそ、私たちが受けた『ぜいたく』はなかつたか」と。